

服部長七（はっとりちょうしち）

天保11年（1840）に新川の西山の左官職人の家に生まれた。16歳で父と死別し豆腐屋を始めるが翌年桑名で左官の修業を行い、18歳の時新川に戻って左官業を始めた。その後製酢、製菓、酒造業を営んだが、明治6年（1873）33歳で上京し、日本橋でまんじゅう屋を開業し、虎屋まんじゅうとして繁盛した。ところが雨の日になると水道の水



服部長七

がひどく汚れるので、ある日水源を見にいったその不潔さに驚き、父と同じ左官業に戻って上水道の改良工事を考えるようになった。明治8年、天皇の御学問所のたたき工事や泉水工事などの宮内省の仕事をはじめ、大久保利通、木戸孝允の屋敷のたたき工事も行っており、大いに信用を得た。

明治9年に水中で固まる長七たたき（人造石）を発明した。明治10年と14年の第1回及び第2回の内国勸業博覧会、18年のパリ万国博覧会などで、多くの発明考案品が受賞した。

発明した人造石を海岸堤防工事に役立つことを試すために、明治14年より高浜の服部新田堤防を人造石で築いて大いに自信を得た。その後岡山県吉備浜新田、佐賀県の新田開拓の築堤工事に人造石を使って成果をあげた。

明治17年から長七は、日清・日露の両戦争に大きな役割を果たした広島県宇品港の工事を請負い、苦心の未5年3か月で完成させた。政府は緑綬褒章を贈って、その功績を讃えた。明治26～29年には豊橋の神野新田の築堤、続いて愛媛三津浜・佐渡相川・名古屋・四日市の港、広島や神奈川の護岸工事、明治用水の取入口、上野動物園の塀、白鳥貯木場の樋門工事も行い、台湾の築堤工事の設計もした。西尾市南奥田町の平坂干拓完成碑のそばに、明治31年完成の奥田新田樋門が現存している。明治37年64歳の時に一切の事業から引退した。氏子代表として再興に努力していた岩津天満宮の社務所に隠居し、79歳で没した。精界寺や岩津天満宮に顕彰碑が建立されている。

（碧南市発行「碧南辞典」より引用）